



変化しつつある文化遺産 広東醒獅の現状について

彭 偉文 (COE研究員・RA) PENG Weiwen

広東醒獅は代表的な中国南方獅子舞の一つで、清・乾隆年間に、仏山に起源したとされる。主に中国の広東省、広西チワン族自治区の東南部、香港、マカオに分布しており、海外の華人社会でも広く行われており、華やかな獅子頭や胴幕と、武術に基づいた激しい振り付けなどの特徴を持っている。広東醒獅は本来、主に「武館」という武術団体に伝承されてきたため、芸態から獅子頭の紋様まで、伝承母体とその仕組みに著しく影響されてきた。現在、村落や企業、業界組合などによる組織や、営利を目的としたさまざまな団体によって伝承されている。2006年5月、広東醒獅は国の非物質文化遺産に認定された。ただし、認定以後の保護、伝承などについて、国からの明確な指導や法的な規制はない。そして、国からの補助金が保護項目の伝承地まで下りるため、たいした区別はないが、広州醒獅、仏山醒獅、遂溪醒獅と三つの主な伝承地によって分けて申告し、別々に認定された。

昨年の11月1日から2週間、若手研究員として、中山大学中国非物質文化遺産研究センターを訪れた。派遣先の先生方の紹介で、仏山市博物館所属の黄飛鴻記念館武術龍獅団の団長の陳幼民氏、獅子頭生産会社の取締役の夏志成氏を訪問し、広州市の近郊にある沙坑村で現地調査を行った。

陳幼民氏は1948年に生まれ、醒獅の名人として知られている。中国の文化部、国家民族事務委員会及び中国舞蹈家協会が組織した全国民族民間舞踊調査で、彼とその師匠・趙栄が広東醒獅のフルセットを演じ、模範舞踊として『中国民族民間舞踊集成・広東巻』に記載された。1999年に、北京の天安門広場で行った建国50周年記念大典で、彼はヘッドコーチとして、広東南獅献礼団を率いて芸を披露した。また、彼は武術にも優れており、広東の「武林百傑」の一人に選ばれている。

夏志成氏は陳幼民と共に醒獅の名人とされ、1999年の大典では、献礼団の幹部として北京に行っている。現在、彼は獅子頭の工場を経営しながら、仏山市武術協会の副会長を務めている。その工場の製品には獅子頭の他、胴

幕や専用の靴をはじめ、楽器など、広東醒獅のあらゆる道具が含まれている。また、注文に応じ、北方獅子の頭や龍舞の道具も作っている。広東省内の注文の他、東南アジアや欧米からの引き合いも非常に多いという。

沙坑村は本来仏山の近くにあったのだが、1950年代、軍用空港の建設に伴って村全体が広州市の近郊に移転した際、広東醒獅の伝統は村と共に現在の地に移ってきた。1997年に正式に設立された「沙坑村龍獅団」は、多くの国際大会で優勝し、「民族民間芸術之郷」と「中国国家醒獅集訓基地」に指定されている。村民の多くは周の一族に属し、毎年旧正月の8日に、友好関係のある村に招待状を出し「生菜会」という醒獅大会を開催している。

先に述べたように、文化遺産に認定されたが、国からの指導や法的規制がないため、広東醒獅は従来発展し変容してきた道を、これからも辿っていくと考えられる。つまり、今回の調査で見られた広東醒獅の変化は、文化遺産に認定されてから起こった変化ではなく、また認定された後もその変化がとめられるとは思わないからである。

別稿で論じたが、新しい技を追求するのは、中国における多くの獅子舞にとって当然のことである。その理由はいくつかあるが、宗教性の希薄さ、及び獅子舞の芸を以って生計を立てている芸人の立場が主な原因であると思われる。広東醒獅も例外ではない。その他、広東醒獅は1970年代から競技になった。最初のルールはA5判8ページ程の小冊子で簡単なものであったが、現在は完全なルールができ、年に数回の国際大会を開催するようになった。そのため、広東醒獅のあらゆる面に変化が起こっている。

なかでも、振り付けと道具の変化が最も著しい。広東醒獅の振りにはいくつかの流派があるが、そのほとんどはフルセットを演じるのに40分以上かかる。競技化した醒獅の振りは非常に激しく、40分間舞い続けるのには体力的に無理があること、また時間を節約する目的もあって、国際大会では参加チームごとに10分から12分の時間

制限がある。現在、多くの醒獅団体はこれに適したコースをアレンジして練習に力を入れている。また現在の若者は、昔と違って普段は肉体労働をほとんどしないため、体力が落ちていると陳幼民氏は指摘する。

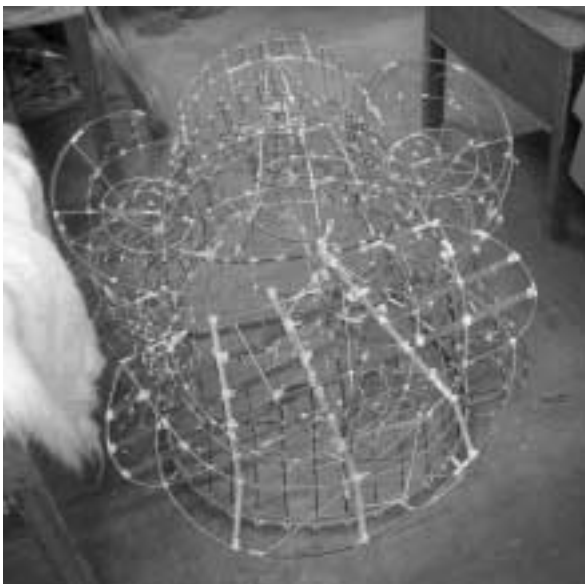
広東醒獅は、基本的に動きの激しい中国獅子舞の中でも、特に技が難しく華やかなものである。そのため、重さ4~5キロの軽い獅子頭を使っている。広東醒獅の獅子頭は典型的な張子獅子頭である。竹で骨を組み、その上に何重もの紙を張り、目蓋などの動くところは絹で作り、乾かしてから紋様をつけて出来上がる。伝統の紋様は、『三国志』の劉備、関羽、張飛または「五虎将」をイメージしたものが多かったが、数年前から東南アジアの影響で、紋様が簡単になり、赤や紫、金などの色が多く使われるようになった。最近では、国際大会の特に激しい振り付けに適するために、小さくて軽い獅子頭の需要が高まっている。寸法を小さくするほか、竹骨を細くし、紙を三重から二重にするなど、さまざまな工夫がこらされた。仏山で代々獅子頭を作ってきた有名な黎一族の五代目・黎婉珍を自分の工場に迎えた夏志成は、伝統を守りたいと強調していたが、注文の多くは新しい型の獅子頭であるため、現実に逆らうことができないようである。

ほかに注目すべきことは、広東醒獅の伝承母体とその自己認識の変化である。前述のとおり、醒獅は本来、武館によって伝承されていたが、中華人民共和国成立後、武館は姿を消し、企業や村落などによって組織された醒獅団体が主な担い手になっている。これらの醒獅団体は、その上級機関や村からある程度資金援助を得ているが、

基本的に年中行事や、催し物、店や企業の開業などの際に雇われて芸を行い、収入を得て運営している。そのため、客からの万一の要望に応じられるように、伝承してきた醒獅の他に、北方獅子の練習も少しは行わなければならない。

沙坑は、大都市の近郊にあるため、農業をやめて工場や住宅建設などを営み、生活が非常に豊かになった。仕事で都合が悪い、厳しい稽古に堪えられない、など様々な理由で、醒獅に多くの時間と精力を費やす人が少なくなった。醒獅の伝統を保ち、大会でいい成績を収めるために、比較的経済発展の遅れている湛江などの地域から子供を雇い、武術と醒獅を教え、村の代表として大会に参加させるようになった。湛江は広東省の西南部にあり、醒獅と武術の伝統を有しているところである。その醒獅団体に頼み、10歳前後で素質のある子供を探し、実家を離れて沙坑に住み込ませ、給料を払い、午前中は醒獅と武術の稽古をさせ、午後は学校に通わせる。彼らは元々の村民ではないため、いつか沙坑から去るはずだと、沙坑龍獅団の責任者も覚悟しているようである。他所から雇ってきた人が行う醒獅は、沙坑の醒獅と言えるかどうかについて聞くと、答えは肯定であった。沙坑が雇った人が、沙坑から給料をもらい、沙坑村の名義で大会に出ているから、たとえ村民でなくても、その醒獅は沙坑のものである、と。

この数年間、醒獅の調査をしてきたとはいえ、このような現象を見たのは初めてであった。これについて、更なる観察と調査を行いたいと思う。



黎婉珍が作った獅子頭の竹骨。



経済発展の遅れた地域から雇われてきた子供たち。